

分離動詞とその発展史についての考察

林 秀彦
能 木 敬 次

1. 序

長年、ドイツ語の教育に携わってきて、教師としての経験の中でどうにも釈然としないことが二・三ある。それは極めて初歩的なことであるが、ドイツ語だけでなくインド・ヨーロッパ語における「名詞の性」(Gender)の問題と「分離動詞」の存在に関する問題である。そもそも英語既習者にとってドイツ語学習を始めるにあたって戸惑う点はいくつかある。

それは動詞の人称変化の多さ、定冠詞・不定冠詞類の種類と変化の多さ、形容詞の付加語変化、副文などにおける定形後置の問題であるが、それらは私見ではあるが、学生に理解・納得させるのにそれほど問題とはならない。つまり「それらの複雑さはもともと英語にもあった」、「英語は古来より、その影響関係の複雑さゆえ、文法の処々において単純化を進めていった」¹⁾、「英語以外のヨーロッパの言語はいまだに多くの複雑さを保持している」、と説明できるからである。

しかし、「名詞の性」に関しても同じ説明が可能であるが、われわれ「ウラル・アルタイ語族」は名詞に性を持たないため、また、英語の名詞には現在、「性」がまったくと言ってよいほど抜け落ちているので、大いなる違和感が彼らの脳裏に残るようである。また、「分離動詞」にしても「首(前綴り)がポーンと飛んで後ろに付く」とか「夜店のスマート・ボールのようにどんどん打たれた球が最後尾に付く」といささか時代錯誤的な説明をしても学生は心から納得してくれない。結果、釈然としないまま、ひとまず単位を

取って彼らは学園を去る。こんな学生が今までに何百万人いただろうか。教師だって同じ状況ではないだろうか。

(勿論、これはドイツ語だけの問題ではないのであるが)「名詞の性はビスマルクが決めたのだ」といったような荒っぽい説明で済ましてはいないだろうか。

何十年も教えていて「ビスマルクが…」といったような説明はやはり罪であろう。中にはいる優秀・誠実な学生の当惑した眼差しが心に痛い。ネイティブ教師の自国語に対する認識についてもどうもわれわれの立ち位置と変わらないようなので、ここでわれわれはこの問題に徹底して立ち向かわなければならない、と考えたわけである。今回、まずは「分離動詞」の問題から始めることにする。

2. 分離動詞の定義

a.-1 複合動詞の種類と大原則

分離動詞 (*trennbare Verben*) という語彙形態はゲルマン語の、それも三種類の希少な言語のみに見られるものである²⁾。しかし、その語法上の現象はいささか複雑なので、それについて考察する前に、まず、分離動詞が含まれる複合動詞について定義をし、区別する必要がある。

それぞれ、次のように大きく定義できよう。

- ①ある動詞の語基とある語基から構成される複合動詞である。二つの語基は文構成の状況により結合したり、分離したりする。このような動詞が「分離動詞」と呼ばれる。

例：aus-gehen (外出する、消える)

Das Licht geht aus. 「明りが消える」

- ②ある形態素とある動詞の語基は結合しながらも、分離しないでそのまま単一動詞のように用いられる語形態がある。このような動詞は「非分離動詞」(untrennbare Verben) と呼ばれる。

例：ent・gehen (逃れる)

Er entgeht der Gefahr. 「彼は危険から逃れる」

- ③ある動詞語基とある語基が結合すると、分離と非分離の双方の機能を有し、相互に意味の「棲み分け」をするものがある。このような動詞は「分離・非分離動詞」(trennbare-untrennbare Verben) と呼ばれる。

例：um・gehen (分離：噂が広まる、～を取り扱う)

Es geht ein Gerücht um. 「噂が広まる」

um・gehen (非分離：迂回する、回避する)

Diese Straße umgeht die Stadt. 「この道路はその都市を迂回している」

a.-2 調査対象の範囲

分離動詞には次の b.-1 で示すような種類や共通の特徴があるがこの分離動詞の中には、例えば、第一構成要素が動詞である kennen-lernen や名詞である rad-fahren のように現在の正書法では認められていない動詞も含まれている。

また、この他に歴史的な調査をする場合、歴史的変化も考慮する必要がある。ある時期には英語の副詞辞 (adverbial particle) + 動詞のように一つの動詞句として存在していた動詞が、時の経過と共に徐々に減少して現在では完全に消滅してしまった動詞もあるし³⁾、現在存続している動詞でも現在までの変化過程や諸規則により今のような特徴をもつようになったのであり、長い歴史の中ではその形態も、前綴の位置も今とは大きく異なっていたことも

十分に考えられ得る。

これら正書法の問題、歴史的な変化の問題を考慮に入れて今回の調査対象は、その時代の正書法で分離動詞として報告されているものや認められているものに加え、構造的に次節で示す分離動詞の特徴をもっているもの、研究書やドイツ語史の中で既に分離動詞として認められているものも含めることにする。続け書きか分かち書きかに関しても問題があるので、ここでは続け書きされているかどうかは問わないことにする。

b.-1 分離動詞の種類・共通特徴

現代の分離動詞の種類にはどんなものがあるだろうか。分離動詞は第一構成要素である前綴と第二構成要素である基礎動詞から成り立っており、この第一構成要素の品詞によりグループ化できる。第一構成要素の種類には前置詞・副詞、副詞、名詞、形容詞、動詞などがあり、次のような動詞が含まれる⁴⁾。

(1) 前置詞・副詞⁵⁾

auf-stehen (起きる), an-fangen (始める), ein-schlafen (寝入る),
aus-gehen (外出する), nach-folgen (後に続く)

(2) 副詞

empor-fahren (上昇する), los-fahren (出発する),
zusammen-tragen (集める), her-geben (こちらへ手渡す)

(3) 名詞

rad-fahren (自転車に乗っていく), statt-finden (開催される),
teil-nehmen (参加する), haus-halten (やりくりする),
maschine-schreiben (タイプを打つ)

(4) 形容詞

frei-geben (自由にする), voll-bringen (成し遂げる),
tot-schlagen (殴り殺す), klar-machen (理解させる),
offen-halten (開けておく)

(5) 動詞

kennen-lernen (知り合いになる), sitzen-bleiben (留年する),
spazieren-gehen (散歩に行く)

分離動詞を第一構成要素の品詞から見るとこのようにグループ化できる。では、第一構成要素が品詞である他にこれらの分離動詞に共通する特徴とはどのようなものであろうか。

複合構成から成る語をその特徴ごとに分類している研究者や研究書を参考とすると、Erben (1983) は複合⁶⁾と派生の二つに分類し、自由形態素と自由形態素の結合を複合、自由形態素と拘束形態素の結合を派生としている。動詞を例として挙げると次のような区分となる。

- 複合語：自由形態素＋自由形態素＝fluch-beten (呪う), lob-tadeln (お追従を言う)
- 派生語：拘束形態素＋自由形態素＝接辞＋動詞＝be・finden (ある),
ent・brennen (燃え上がる), er・brechen (破る), an-nehmen (受け取る), auf-fressen (残さずに食べる), durch-ziehen (通す),
über-fallen (垂れる), unter・nehmen (企てる)

Erben は派生語については、自由形態素と拘束形態素の結合と言っているが、動詞については接辞 (Affix) を伴う動詞の中に、第一構成要素にアクセントのない be-, ent-, er-, ver-, zer-, miss-, アクセントのある ab-, an-,

auf-, aus-, bei-, ein-, nach-, vor-, zu-, 並びにアクセントがあつたりなかつたりする durch-, über-, um-, unter-, wi(e)der- + 動詞も含めている⁷⁾。

Fleischer (1969) は複合構成の動詞を複合、派生、接頭辞構成と三つに分け、複合とはある品詞+動詞のことであり、名詞+動詞、前置詞+動詞、動詞+動詞の結合などがここに含まれる。派生とは Erben と異なり、基礎語+接尾辞のことを指している。接頭辞構成とは接頭辞+基礎動詞のことであり、Fleischer の分類は次のようになる。

- 複合語：品詞+動詞=form-geben (構成する), bloß-stellen (弱点をさらす)
- 派生語：基礎語+接尾辞=ackern (畑を耕す<Acker), färben (彩色する<Farb)
- 接頭辞構成：接頭辞+基礎動詞=be·decken (覆う), er·bauen (建設する), ver·bieten (禁じる), an·flehen (懇願する), auf·geben (中止する), ein·kehren (訪れる), durch·schneiden (切断する), über·fallen (垂れる)

Fleischer が接頭辞に数えているものには、非分離前綴り be-, er-, ent-, zer-, ge-, miss-の他に、分離結合をする分離前綴り ab-, an-, auf-, aus-, ein-, los-, nach-等があり、また、分離・非分離の接頭辞としては durch-, über-, um-, unter-, wider-がある⁸⁾。

Lexikon der Germanistischen Linguistik (1980 以下、略記 LGL) の Wortbildung の項 (筆者は Peter von Polenz) でドイツ語の複合構成を複合、派生、接頭辞構成、接頭辞・接尾辞派生、共生という五つに分類している。複合とは、二つあるいはそれ以上の語核内容素 (Wortkern-Plerem) から成る組み合わせである。派生は、語核内容素と後続する接尾辞との組み合わせである。

接頭辞構成は、接頭辞と語核内容素の組み合わせである。接頭辞・接尾辞派生とは接頭辞+派生語であり、共生とは複合と派生から成る語である。LGLの挙げている動詞の例を示すと次のようになる。

- 複合語：二つ以上の語核内容素=wider-streben (抵抗感がある)
- 派生語：語核内容素+接尾辞=lack・ieren (ラッカーを塗る)
- 接頭辞構成：接頭辞+語核内容素=er・blühen (開花する)
- 接頭辞・接尾辞派生：接頭辞+派生語=be・nachricht・igen (知らせる)
- 共生：複合+派生=über・nachten (泊まる<Nacht)

LGLでは、非分離辞を接頭辞と呼んでおり、第一構成要素の ab-, an-は接頭辞とはみなされていない⁹⁾。この点 Fleischer と異なる。アクセントのない分離しない hinter・legen は接頭辞動詞 (Präfixverb)、アクセントがあり分離する hinter-legen は不変化詞動詞 (Partikelverb) と呼んでいる。

野入・太城 (2002) では、他の独立して用いられる語と結びつき、新たな意味をもつに至った場合、その新しい動詞を複合動詞とみなしている。これに対し、接頭辞や接尾辞を付加したり、幹母音変化させたりして作る動詞を派生動詞としている。

- 複合動詞：独立語+動詞=kennen-lernen (知り合いになる), teil-nehmen (参加する), wahr-sagen (予言する), auf-steigen (乗る)
- 派生動詞：接頭辞+独立語 (+接尾辞) (n/en) =be・halten (保持している), ver・jagen (追い払う), be・friedigen (満足させる<Friede)
- 独立語+接尾辞 (n/en) =lächeln (ほほえむ<lachen), probieren (試みる<Probe), frömmeln (信心ふる<fromm)
- 幹母音変化動詞=fällen (切り倒す<fallen), säugen (吸わせる<saugen)

独立語＋動詞とは、野入・太城では、具体的には名詞、動詞、形容詞、不変化詞（副詞・前置詞）と結びついた動詞であり、また、第一構成要素の特徴としてアクセントがあり、主文で第二構成要素の動詞から分離するので、このような動詞は一般に分離動詞とも呼ばれる。派生動詞の接頭辞（非分離前綴）としては、be-, ent-, er-, ge-, ver-, zer-, miss-など、接尾辞としては-el, -er, -ig, -ierなどを挙げている。

また、いわゆる分離・非分離前綴 durch-, um-, über-, unter-, wider-, wieder-に関しては、ある時は複合動詞を形成し、ある時は派生動詞を作ると説明している¹⁰⁾。

b.-2 第一構成要素の条件

以上のように複合構成から成る動詞区分は研究者や研究書によって異なるが、これらを参考として、本稿で扱う分離動詞であるための第一構成要素の条件を具体的に示すと次のようになる。

- (1) 主文の現在・過去、疑問文、命令形では分離する
 Das kind steht *auf*. 「子供が起きる」
 Das kind stand *auf*. 「子供が起きた」
 Stehen Sie um 6 Uhr *auf*? 「6時に起きますか」
 Stehen Sie *auf*! 「起きてください!」
- (2) 自由形態素である
 Sie führen sich *anständig auf*. 「彼らは行儀よく振舞う」
- (3) アクセントがある
 Sie ruft ihre Mutter *án*. 「彼女はお母さんに電話する」
- (4) 副文では定形が文末に移動し、定形と結合する¹¹⁾
 ..., weil das Kind *aufstand*. 「子供が起きたので…」

3. 分離動詞についての問題

以上2.で述べたような特徴をもっているのがドイツ語の分離動詞である。分離動詞はゲルマン語だけの特徴のようであるが、ゲルマン語以外にハンガリー語にもあることが知られている。しかし、ハンガリー語を調べてみるとゲルマン語の分離動詞とは使われ方が少し異なるようである。ハンガリー語の分離動詞の前綴は動詞の前後の近い位置に来る。動詞の直ぐ後ろの位置に来るというところは英語の句動詞に似ているが、分離前綴が平叙文では文末ではなく、動詞の近くの位置に来るところは西ゲルマン語の分離動詞とも異なる。ここで取り扱う分離動詞は主文で動詞の前綴が文末に来る西ゲルマン語に特徴的な分離動詞である。

ドイツ語の分離動詞の特徴などについては教える側としてはこれまで教科書に書かれている範囲で学生に説明してきたが、分離動詞の発生や歴史なことについては殆どと言っていいほど分からない。勿論、それらについて詳しいことは初級文法書にも解説されていない。今年度も、学生から分離動詞の前綴りの位置についての質問があった。この問題は同時に教師も学生時代からもっていた問題ではある。これを機に今回この問題について調べてみることにした。

それで、このように前綴りが文末に来るゲルマン語の分離動詞についてここで調べることにした大きなテーマは次の三つである。

(i) いつ頃発生したのか (分離動詞の発生)

(ii) 何故、分離動詞となったのか

(分離動詞の生成過程における変化と成立)

(iii) 分離動詞と枠構造の関係 (分離動詞の完成と枠構造)

そして(iv)として副文における分離動詞の位置も無視できないので調べてみることにする (副文と定動詞と分離動詞)

これらのテーマを設定し、質問した学生にも理解でき、調べられるよう今回は図書館にあるドイツ語史、文法書、辞書、そしてインターネットで手に入る資料を主な手がかりとして分離動詞が分離した理由と答えを語史的に調査し、考えてみることにする。

(i)はドイツ語からゲルマン語についても言及し、(ii)~(iv)は主としてドイツ語について述べることにする。

3.1. 分離動詞の発生

図書館のドイツ語史文献の中で、分離動詞が使われている例文を最初に見つけることができたのは、Schildt (1991) の中世後期になってからであった。

[1] Marggraf Albrecht und sein Fürsten die Sagen *namen* Nürnberg *ein*.

(辺境伯アルブレヒトと彼に従う諸侯たちは、ニュルンベルクを占領したと言っている。)¹²⁾

この時期は動詞領域では、派生という手段によって多くの分離動詞が創出されたことが記録されている。それまではまだ非分離動詞優勢であったのが、この頃分離動詞が前面に出てきたと言われている¹³⁾。

ドイツ語史以外の文献にあたり中世以前の古い時代で分離動詞の出現箇所を示している例として探すことのできたのは、古期ドイツ語の文法書においてであった¹⁴⁾。

古期ドイツ語時代の高地ドイツ語には多くの分離動詞についての用例があるが、「ヘーリアント」や「創世記」のザクセン語には見られない¹⁵⁾。用例を見ると空間関係を示す副詞や前置詞が分離動詞の前綴の要素となっている。この時代、規定要素である前綴を動詞から分離させるか否かは、自由であった。

従って、分離動詞は分離しているものもあれば分離していないものもある。現代ドイツ語の分離・非分離動詞と異なるところは、同じ意味であるのにある時は分離し、ある時は分離していなかったりしているところである¹⁶⁾。以下、高橋の『古期ドイツ語文法』(1994)から例文を引用する。
(ペア例文の上の例が分離形で、下の例が非分離形である。)

• *aba-houwan* (切り離す)

[2] *hou sie aba* 「それを切り離せ」(T.28,3)

[3] *abahio sīn ōra tha₃ zesewa* 「彼は彼の右耳を切り離した」(T.185,2)

• *fora-faran* (先に行く)

[4] *thanne verit er in vora* 「その時、彼は彼らより先に行く」(T.133,7)

[5] *her forafuor iuwih in Galileam* 「彼は汝らよりも先にガリレアに行った」(T.218,5)

• *in-gangan* (入って行く)

[6] *giang mit Kriste er thō fon in in tha₃ sprāhhūs in* 「キリストと共に彼はその後、彼らから離れて裁判所へ入って行った」(O.IV,23,30)

[7] *ingiang er thō skioro* 「彼はその後、直ちに入って行った」

(O. I, 4,19)

また、分離動詞が分離している場合でも前綴は文末に来ていない例もみられる。

• *widar-faran* (戻っていく)

[8] *inti inan ni findanti fuorun widar zi Hierusalem inan suohenti*

「そして彼らは彼を見つけず、彼を探しながらエルサレムへ戻っていった」(T.12,3)

- [9] *inti widarfuoꝛ thō ther heilant in themo megine geistes in Galileam*
「そしてそれから救世主は霊の力をもってガリレアへ戻って行った」(T.17,8)

• *zuo-gangen* (やって来る)

- [10] *gieng thō zuo thie costāri* 「その時あの誘惑者がやってきた」(T.15,3)
[11] *inti zuogieng der heilant* 「そして救世主がやって来た」(T.91,3)

次の二組の例は前綴が基礎動詞の前に来ていても、続き書きになっていない場合である。

• *ingegin(i)-ruafan* (向かって叫ぶ)

- [12] *riaf imo al ingegini thes lantliutes menigī* 「多数のその他の人々が全員、彼に向かって叫んだ」(O.IV,22,15)
[13] *ingegin riaf thō lūto heriscaf thero liuto* 「その時、大声で人々の群れが向かって叫んだ」(O.IV,24,13)

• *hera-queman* (こちらへやって来る)

- [14] *er quam sō risi hera in lant* 「彼はそうのように巨人としてこちらの地へやって来た」(O.IV,12,61)
[15] *ther heilant, ther thanana hera quam in lant* 「そこからこちらの地へやって来た救世主」(O.IV,4,64)

分離動詞の過去分詞の分離可能な規定要素も基礎動詞と結合する場合、基礎動詞に先行する場合、基礎動詞に後続する場合がみられる。

- 基礎動詞と結合する場合

- [16] *than thiū fūlitha ofgiscorran wirthid* 「その腐敗が掻き取られる場合に」 (Pr.)
- [17] *niuwi grab, in themo noh nū nioman ingisezzit was* 「まだ誰も入れられていなかった新しい墓」 (T.213,1)

- 基礎動詞に先行する場合

- [18] *mīn quena fram ist gigangan in ira tagun* 「わが妻は彼女の日々において進んでしまった (=年をとってしまった)」 (T.2,8)
- [19] *ther sweiꝥduah ward thār funtan zisamane al biwuntan* 「その汗ふき布はそこで完全に巻き合わされて見つかった」 (O.V.5.13)

- 基礎動詞に後続する場合

- [20] *nū ther hērōsto thesses mittilgartes wirdit erworpfan ūꝥ* 「今この中つ国の君主は投げ出される」 (T.139,8)
- [21] *ther selbo sweiꝥduah in wār lag gisuntorōt thār, biwuntan thār zisamane, fon themo selben sabane* 「問題の汗ふき布は実際そこに、既述の亜麻布から別にされて、巻き合わされてあった」 (O.V.6.56.57)

このように例文の中で分離動詞を見ていくと、古期ドイツ語時代の分離動詞は、結合の型も文中における位置も一定していなかったようである。

Schmidt (2004) は前綴による動詞として、この時代特によく用いられる動詞 *faran* を挙げている。*faran* はきわめて多様な意味を担う30種類の前綴添加語をもっていた。例えば、*ab-faran* 「立ち去る」、*ana-faran* 「襲いかかる」、*thana-faran* 「そこから去る」、*gi-faran* 「逍遥する」、*hara-faran* 「下りてくる」、*widar-faran* 「～に立ち向かう」、*zi-faran* 「溶ける」や *zuo-faran* 「こちらへ来る」などが見られる。

これら30個の複合語のうち27個までが、Notker によって用いられており、

さらにまたそのうちの11個は彼の作品の中にしか現れないということである¹⁷⁾。

同じ古高ドイツ語の作品 *Otfri(e)d* の「福音書」(新保訳1993)においては、「ルートヴッヒ王に宛てた献呈詩」から、第5巻第25章「この著作を終えるにあたって」まで目を通してみたら、分離動詞を20個以上見つけることができた¹⁸⁾。

また、同じ西ゲルマン語群に属する英語に目を移すと、古英語時代にはドイツ語の分離前綴と似た前綴をもっている動詞が多く存在していたことが報告されている¹⁹⁾。不変化詞+動詞の数は古英語時代は現代英語よりはるかに多く、不変化詞は次第に前の位置から後ろの位置に移動したということであるので²⁰⁾、

upgan → *upgo, go up	uphebban → upheave, heave up
utcuman → *outcome, come out	utfléogan → outfly, fly out

その移行期として古高ドイツ語のように同じ意味をもつ動詞の前綴が基礎動詞の前にあるタイプと後ろにあるタイプが並存していた時期があったであろうと考えられる。これについては、次のような例文を見つけることができた。同じ作品内で同じ不変化詞が同じ動詞に前置されている例と後置されている並存タイプの例文である²¹⁾。

(古英語 *ut*→中英語 *out*)

- (A) Ac se se ðe ðone wer bricð, & ðæt wæter *ut forlæt*, se bið fruma ðæs geflites. (CP 38.279.16)
- (B) Se *forlæt* ut ðæt wæter, se ðe his tungan stemne on unnyttum wordum lætt toflowan. (CP 38.279.13)²²⁾

範囲をもっと広く他のゲルマン語群にまで目を向けてみると、北ゲルマン語群については古北欧語としてノルド祖語があるが、これについては調査した範囲では文献が見つからなかった。しかし、古英語の接頭辞の *ut-* がついた *utlagian* (to outlaw, banish, proscribe) は古北欧語からの借入用法だといわれているので²³⁾、古北欧語にも複合動詞が存在していたと推測できる。更に、ドイツ語の分離動詞の初期形態に近い、同一動詞の不変化詞前置形と後置形の並存タイプも存在していることが分かった²⁴⁾。

(A) *hvé nær skaltu upp taka slikan ágætisgrip?*

[=when shall-you *up take* such glory-thing? ‘When are you going to wear such a splendid piece?’] (Laxdæla saga 146.8 [1330])

(B) *ok hafði tekít upp mikít fj · lmenni*

[=and had taken up big crowd. ‘and had gathered a big crowd’]

(Laxdæla saga 160.14[1330])²⁵⁾

東ゲルマン語群に属しドイツ語より古いといわれているゴート語にも不変化詞+動詞の複合語は多数存在していたことが分かった。確認した辞書の見出し語の説明では、動詞+不変化詞のタイプより不変化詞+動詞のタイプの方が多かったようである。

例えば、*Mæso-Gothic Glossary* (1868) から動詞 *gaggan* (to gang, go, go one’s way) に記載されている複合動詞と動詞句を拾ってみると次のようなものがある。

(複合動詞)

ga-gaggan (to come together, resort), *af-gaggan* (to go away, depart), *afargaggan* (to go after, follow), *mith-afargaggan* (mith=with, amongst; *afargaggan*=to go after, follow), *ana-gaggan* (to come after, be future / G. *an-gehen*), *at-gaggan* (to go to, come), *du-at-gaggan* (to go to), *inn-at-gaggan*

(to enter, enter into, go into), faúr-gaggan (to go by, pass by), faúr-bi-gaggan (to go before, precede), faúra-gaggan (to go before, rule over), inn-gaggan (to go in, enter), mith-gaggan (to go with), thaírh-gaggan (to go through, come through), ufar-gaggan (to go over, transgress), us-gaggan (to go out, come out), ut-gaggan (to go out, come out), withra-gaggan (to go to meet)

(動詞句)

gaggan afar (to go after, follow)

上の例を見れば分かるように、複合動詞の中の afar-gaggan と、動詞句として挙げている gaggan afar は同じ意味で、まさにドイツ語の分離動詞の初期タイプである不変化詞＋動詞と動詞＋不変化詞の並存形であるといえるであろう。また、ana-lagjan のもう一つのタイプである動詞＋不変化詞のタイプも同辞書の中にあった。

(不変化詞＋動詞)

(動詞＋不変化詞)

afar-gaggan

⇔ gaggan afar (to go after)

ana-lagjan

⇔ lagjan ana (to lay upon)

その他、別の辞書の A comparative glossary (1887) には gaggan と次のような前置詞や副詞との動詞句的な表現が紹介されている：ana, du, faírra, faúra, fram, hindar, in, miþ(th), þ(th)áírh, inna。ということは、不変化詞 ana, faúra, in, miþ(th), þ(th)áírh, inna は上例 gaggan 複合動詞の第一構成要素にもなっており、これらのペアは共にドイツ語の分離動詞の初期形態である不変化詞＋動詞と動詞＋不変化詞のペアを構成していることになる。

(不変化詞＋動詞)	(動詞＋不変化詞)
ana-gaggan	⇔ gaggan ana (to come after)
faúra-gaggan	⇔ gaggan faúra (to go before)
inn-gaggan	⇔ gaggan in(na) (to enter)
mith-gaggan	⇔ gaggan mith (to go with)
tháirh-gaggan	⇔ gaggan tháirh (to go through) ²⁶⁾

分離動詞の発生に関するこれまでに得た調査内容をまとめることにする。古期ドイツ語時代に同一動詞の形態として不変化詞＋動詞と動詞＋不変化詞という並存タイプが存在していたということが分かった。この頃はまだ不変化詞が後置している場合でも不変化詞は文末に来ていない例もみられた。ドイツ語と同じ西ゲルマン語群に属する英語にも、また北ゲルマン語群にもドイツ語の古期時代の分離動詞と類似した並存タイプをもった動詞が存在していたことが分かった。不変化詞＋動詞と動詞＋不変化詞という並存タイプをもっている複合動詞を分離動詞の初期形態であるとすれば、ドイツ語の場合は古期ドイツ語時代、英語は古英語時代そして北欧語では古北欧語時代まではその存在を確認できたといえよう。更にもっと古い東ゲルマン語群に属するゴート語にも、辞書からではあるが、不変化詞＋動詞と動詞＋不変化詞という分離動詞の両方のタイプが存在していたというところまで確認できた。

ゴート語は現在は使われていないゲルマン語として知られているが、現在まで存続していれば、これらの複合動詞が現在のドイツ語の分離動詞あるいは英語の句動詞のように発展していった可能性は考えられる。

この時代以前に、あるいはもっと古いゲルマン祖語時代にまで遡り、不変化詞と動詞の並存タイプをもった分離動詞が既に存在していたかどうかは、文献制約上の問題もあり、今回の調査ではこれ以上詳しいところまでは示せなかった²⁷⁾。

3.2. 分離動詞の生成過程における変化と成立

3.2.1. 調査前段階の推定

では、どうして現在のドイツ語に特徴的な前綴後置の分離動詞というものが生まれたのであろうか。ここで問題となってくるのが語順である。分離動詞となって動詞が前後に分かれる可能性としては次の三つのパターンが考えられる。

- ①動詞部後置 ⇒ 定形第二位 = 前綴と基礎動詞の分離
- ②定形第二位 ⇒ 動詞部後置 = 前綴と基礎動詞の分離
- ③定形第二位 + 動詞部後置 = 前綴と基礎動詞の分離

①は、まず、動詞部が文末へ移動し（後置）、その後、基礎動詞のみ第二位へ移動する（定形第二位）。その結果、前綴と基礎動詞の分離が生じるという動きである。

②は、まず、基礎動詞のみが文章の二番目の位置に定着し（定形第二位）、その後、他の動詞部が文末へ移動する（後置）。その結果、前綴と基礎動詞の分離が生じるという動きである。

③は、基礎動詞のみが第二位へ移動（定形第二位）し、同時に他の動詞成分は文末へ移動する（後置）。その結果、前綴と基礎動詞の両成分は少しずつ離れて分離が生じるという動きである。

これらのいくつかの可能性が考えられるが、調査の前段階において、語順、統語に関する研究論文の存在を知り、その中のいくつかについては目を通す機会があった。

それらから得られた語順、統語に関する情報の中で、河崎（1997）の論文から定形の位置と移動に関係する要点を挙げれば次のようになる。

- (イ) ゲルマン祖語においては、近年の理論的研究によって裏づけされてきているように、定形後置が通常の語順であった。(SOV=定形後置)
- (ロ) それから、定形が第二位へ移行し、定形を修飾する文肢の配列に関して二つの可能性が生じた。(SVO=V2 語順)
一つは英語に代表されるような動詞に関係のある語順が前に来る配列であり、もう一つはドイツ語に代表されるような修飾語は元の位置にとどまり、定形のみが移行する配列である。
- (ハ) この二つのケースのうち、ゲルマン語という自然言語で在証される後者のケースにおいて分離構造が生じる²⁸⁾。

(ロ)について補足すると、理解しやすい例として河崎は次のような一組の例文を挙げている。

Mary gave the money to her friend in her room yesterday.

0 1 2 3 4

Maria gab gestern in ihrem Zimmer ihrem Freund das Geld.

0 4 3 2 1

「メアリ (マリア) は、昨日部屋で友人にお金をあげた。」

英語も現代英語では SVO となっているが、古英語時代は主節では SVO、従属節では SOV という語順が規則的であった。その後、古英語末期になると、従属節も SVO に固定されていったということである。また、語順の固定化については、宮前 (1997) は次のように言っている。

名詞の格がその語尾によって明示されている場合には語順は比較的自由でも意味の混乱を招かないが、格語尾が失われてしまうと、どれが主語でどれが目的語か語順によってしか判断できなくなる。その結果、語順が固定される必要が生じる。こうして、古英語では、主節では SVO、従属節では SOV

という語順が徐々に規則的になり、さらに古英語末期になると従属節中でもSVOに固定されていった²⁹⁾。

そこで、このような研究報告をもとに、次の①～④の順序で初期の分離動詞が現在の分離動詞の位置へと変化していった過程を推定してみた。

- ①ゲルマン祖語から、定形後置という通常の語順があった。
- ②ドイツ語も動詞と関係のある成分は動詞の近くの後ろの方へに移動するという傾向があった。(SOV=定形後置)
- ③その後、定形が主文において第二位へ移行するという動きが生じ、動詞が二番目の位置に移動することになった。(SVO=V2語順)
- ④分離動詞も同様にこの統語現象の流れに影響をうけたが、これにより結びつきの弱い分離動詞は前綴りが元の位置の文末に留まり、動詞が定形第二位の位置に移動して前後に分離するようになった。

このような順序で変化が起こっていったと仮定すれば、論理的で非常に理解しやすい過程となるため、この段階では分離動詞は恐らくこういう順序で変化し、推移して行ったであろうとみなしていた。

しかし、一見完成されたようなこの順序でもまだ理解できないことが残っている。それは、定形第二位という現象が主文では起こって、副文では、なぜそれが起こらなかったのかということである。

まだ問題は存在するにしても、これによって分離動詞の形成過程がある程度把握できたということで、次は、これらのことについて実際の文献や例文にあたって確認作業を試みることにする。

3.2.2. 語順と定動詞の位置

「何故、分離動詞となったのか」、「どうして今のような分離動詞の位置になったのか」について確認調査するために、語順と主文、副文の動詞の位置について歴史的な流れを調べてみることにした。参考としたのは、語史文献でこれらについて比較的詳しく説明されている Schildt の「ドイツ語史」(1991) である。

まず、分かりやすいように Schildt の時代区分と一般的な時代区分を比較し、次に各時代の語順と動詞の位置についての関係箇所を紹介することにする。

(Schildt による時代区分)		(一般的な時代区分)
• 500～1050年 初期中世ドイツ語	→	古高ドイツ語
• 1050～1250年 盛期中世ドイツ語	→	中高ドイツ語
• 1250～1500年 後期中世ドイツ語	→	後期中高ドイツ語
• 1500～1800年 初期近代ドイツ語	} →	新高ドイツ語
• 1800～1950年 近代ドイツ語		
• 1950～現代 現代ドイツ語		

〈ゲルマン語時代〉

(語順)

- 語順や文肢の配列については、とりわけ文のリズムにかかわる条件が、何といても決定的なものであった。この文のリズムという観点から語や文肢の配列は比較的自由であった。

(ヨアヒム・シルト橋訳1991 S.24)

(主文と動詞の位置)

- ゲルマン語の文構造と文肢について現在知られていることは、インド・ゲルマン語の場合と同様にきわめて不十分である。(同 S.23)

(副文と動詞の位置)

- 多くの種類の副文が形成されるのにもなって、しだいに主・従属関係の形式、すなわち複合文が発達してきた。
- しかし、今日のドイツ語の実際と比較すると、並列文が圧倒的に多かった。(同 S. 24)

〈初期中世ドイツ語時代〉

(語順)

- 主文における定動詞第二位、副文では、すでに定動詞の後置がみられるが、文中の定動詞の位置は、まだ確定していなかった。(同 S. 51-52)

(主文と動詞の位置)

- 平叙文では、すでに現代ドイツ語の典型的配置と同様に、定動詞が第二位に配置されていた。(同 S. 51)

[22] *ik gihorta dat seggen.* 「私は、それが言われるのを聞いた。」(『ヒルデブランドの歌』。以下、例文の出典は同じ。)(同 S. 51)

- しかし、これと並んでまた、定動詞を文頭に配置することもできた。

[23] *araugta sih imo thie engil.* 「彼の前に天使が現れた。」(同 S. 52)

(副文と動詞の位置)

- この時期に使われ始めた副文では、すでに定動詞は文末配置された。

[24] *thaz si iro namon breittin.* 「彼らは彼らの名前を広めるために。」

(同 S. 52)

- しかし、定動詞の位置は、必ずしも、文末に固定された状態ではなかった。

[25] *into fuorun alle, thaz biiāhin thionōst iogiuuelih in sinero burgi.*

「全ての人々が、僕であることを告白するために、その場を立ち去り、一人残らず市へ行ってしまった。」(同 S. 52)

〈盛期中世ドイツ語時代〉

(語順)

- この時代になってもまだ、文肢の配列には規則性が確立されていなかった。(同 S. 78)
- 大部分の韻文で書かれている文献では、文肢の配列は、韻律構成と押韻によって左右された。(同 S. 78)

(主文と動詞の位置)

- 平叙文では、定動詞は今日のドイツ語と同じようにすでに多くの場合、二番目の位置を占めた。

[26] *ich saz uf eime steine.* 「私は石の上に座っていた。」

(ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの詩) (同 S. 78)

- しかしまた、定動詞の前にいくつかの文肢が配置されている文もあった。

[27] *Volker der snelle*

zuo des sales want sinen schilt den guoten

leint er von der hant

「勇敢なフォルカーは、自らの立派な楯を下に置いて」(『ニーベルンゲンの歌』) (同 S. 78)

- 『ニーベルンゲンの歌』では、平叙文における定動詞の文末配置の例も豊富にみられる。

[28] *den ger im gein dem herzen stecken er dō lie.*

「彼は胸に槍が刺さったままにした。」(『ニーベルンゲンの歌』)

(同 S. 78)

(副文と動詞の位置)

- 導入の副文では、定動詞は現代ドイツ語と同様にすでに文末に配置されることが多くなっていた。

[29] *dō im der seiten dōnen*

sō suozlich erklanc

「彼は提琴をこの上もなく

優しく奏でて語ったとき」(『ニーベルンゲンの歌』) (同 S. 78-79)

- 同時にまた定動詞が他の位置にきている副文もあった。

[30] daz von der wunden spranc daz bluot im von dem herzen vaste an die
Hagenen wat

「そり結果、胸の傷から吹き出た血が危なくハーゲンのガウンに付くところであった。」(定動詞が第二位に配置されている例)(『ニーベルンゲンの歌』)(同 S. 79)

- いろんな種類の従属接続詞が使われるようになり、daz の使用範囲も広がった。付加語文は、関係代名詞 der, das, diu によって導かれた。

[31] wir vinden ir vil wenic, die türren uns bestan

「あえてそれを引き受けようという者は、ごく僅かしかいなかった」(『ニーベルンゲンの歌』)(同 S. 80)

〈後期中世ドイツ語時代〉

(語順)

- 文肢は、その存在価値とコミュニケーション上の重要度に応じて定動詞の近くに配置され、情報価値の最も高い語は、平叙文では文末に配置されるようになった。(同 S. 103)

(主文と動詞の位置)

- 一定の文肢についてその配列の法則性が確立される傾向は、さらに進んだ。こうして、例えば、定動詞は平叙文にあってはしだいに第二位を占めることが多くなっていった。(同 S. 103)

(副文と動詞の位置)

- 後期中世ドイツ語の時代に、複雑な事実関係を一つの文章で表現する技法が発達した。多様なタイプの副文から構成される文肢の割合が増えたのである。(同 S. 103)

〈初期近代ドイツ語時代〉

(語順)

- 16世紀には、単文に対して、さまざまな副文を伴う複合文の割合がさらに増加した。(同 S. 153)
- 複雑な構造の文の形式との関係で、独立文と従属文の導入部にさらに多くの接続詞が用いられるようになった³⁰⁾。(同 S. 153)

(主文と動詞の位置)

- 16世紀には、主文と副文における定動詞の位置が確定した。一般に定動詞は、平叙文では第二位を占めるようになった。(同 S. 153)

(副文と動詞の位置)

- 16世紀には、主文に結び付けられた副文においては、定動詞が文末に配置されることが次第に多くなった。(同 S. 153-154)
- 17世紀には、定動詞の文末配置は、主文に結合された副文の構造的特徴となると同時に、統一共通文語の規範のひとつとなった。(同 S. 154)

3.3. 分離動詞の完成と枠構造

Schildt のドイツ語史から時代区分と定動詞の位置について分かることは、主文における定動詞の位置はゲルマン語時代に知られていることは不十分であり、古高ドイツ語 (Schildt の区分では初期中世ドイツ語) では現代ドイツ語同様、定動詞が第二位に配置されていた。しかし、定動詞の文頭配置やそれ以外の配置も見られる。中高ドイツ語時代 (Schildt の区分では盛期中世ドイツ語時代) では、現代ドイツ語同様多くの場合二番目の位置を占めていた。しかしまた、定動詞の前にいくつかの文肢が配置されている文が見られたり、主文における文末配置も豊富である。

後期中高ドイツ語時代 (Schildt の区分では後期中世ドイツ語時代) になると主文における定動詞の位置は、次第に第二位を占めることが多くなっていった。こうして、新高ドイツ語時代 (Schildt の区分では初期近代ドイツ

語時代)には主文、副文における定動詞の位置は確定し、主文では第二位を占めるようになった。このように、主文における定動詞の位置は、第二位への傾向が早い時期から見られるものの、過去に遡れば遡るほど不安定で揺れていた様子が窺われる。

例文[23]において、古高ドイツ語時代 (Schildt の区分では初期中世ドイツ語時代) に定動詞が文頭に配置されている例が見られるし、また、次のような例もある。

(定形第二位)

[32] allera worolti ist er līb *gebenti*. 「全世界に彼は生命を与える」

(O. I. 5,31)

(定形が第二位以降に位置する)

[33] thie fordoron bī barne *wārun* chuninga alle 「先祖達は代々全て王であった」 (O. I. 5,8)

(定形が文末に位置する)

[34] ik mī dē *ōdre wēt* 「我は他の人々を知っている」 (HL.11)

分離動詞の基礎動詞の位置も定動詞としてこれと同じ動きをしていたものと思われる。分離動詞の定動詞が文頭に来ている例は例文[2]、[6]、[10]、[12]など。第二位に位置している例は、例文[4]、[14]。後ろに位置している例は、例文[8]。

中世ドイツ語時代 (Schildt の区分では盛期中世) も定動詞の位置が二番目に来ている例が例文[26]で確認できる。定動詞の前にいくつかの文肢が来ている例は例文[27]、主文における文末配置については例文[28]で見ることができる。

同様に、分離動詞の基礎動詞の位置もこの時代上述の定動詞と同じように様々な位置を占めていたものと思われる。下の例文は『中高ドイツ語小辞典』(1991)からのものである。

(定形第二位)

- [35] *der roc suohte allenthalben an* <*an suochen* 順応する> 「ローブ (〈注〉竹の長いワンピースの婦人服) はどこも体にぴったりと合っていた。」 (同 S. 19)

(定形が第二位以外に位置する)

- [36] *die übermüeten degene ein ander sâhen si an* <*an sehen* 見る> 「大胆な勇士たちは互いに顔を見合わせた」 (同 S. 18)
- [37] *ir begunde ir herze quellen, ir süezer munt ûf swellen* <*ûf swellen* (激しい感情・興奮によって) ふくれる> 「彼女 (=イゾルド) は胸がいっぱいになり、愛らしい口がふくらんだ。」 (同 S. 572)
- [38] *die snellen Burgonden sich ûz huoben* <*ûz heben* 出発する> 「勇ましいブルゴンド勢は (エッツェル王の国を目指して) 旅に出た。」 (同 S. 597)

分離動詞の前綴の位置については Schildt 分類の時代ごとの語順が参考となる。ゲルマン時代には、語順や文肢の配列については、とりわけ文のリズムにかかわる条件が決定的なものであった。文のリズムという観点から語や文肢の配列は比較的自由であった。中高ドイツ語時代 (=Schildt の盛期中世ドイツ語時代) になっても、文肢の配列には規則性が確立されていなかった。韻文では、文肢の配列は、韻律構成と押韻によって左右された。後期中高ドイツ語時代 (=Schildt の後期中世ドイツ語時代) には、その存在価値とコミュニケーション上の重要度に応じて定動詞の近くに配置され、情報価値の高い語は、平叙文では文末に配置されるようになった。

例文 [2]、[4]、[8] のように、文献で確認した古高ドイツ語時代の分離動詞の位置は種々であった。中世に入っても文肢の位置は韻律構成と押韻によって左右されることが多く、前綴の位置もまた種々のケースがあったようである。例文は同じ『中高ドイツ語小辞典』(1991) からのものである。

(前綴が文末に位置する)

- [39] *swenne ich nu valsch gelerne, so hebt mirn ūf* <ūf heben j³ に対して et⁴ を責める> 「私 (=ジグーネ) がいま不実を行っているとするなら、あなた (=パルチヴァール) は私をそのことで責めてください。」 (同 S. 571)

(前綴が文末以外に位置する)

- [40] *sō kērtē in aber an Minne* <an kēren~を襲う> 「するとまたも愛の女神が彼を襲った。」 (同 S. 17)
- [41] *Marke kam in (=sīn vient) an mit starker wer* <an komen j³ に近付く> 「マルケ王は強力な防衛軍をもって敵に立ち向かった」 (同 S. 17)
- [42] *wie saeclēliche stēt im an allez daz, daz er begāt!* <an stān 似合う> 「彼のすることはすべてなんと素晴らしく彼に似合っていることでしょう。」 (同 S. 19)
- [43] *die starken untriuwe begonden tragen an die ritter* <an tragen 行う, 企てる> 「騎士たちはひどい裏切りを企てた。」 (同 S. 19)
- [44] *wie sīt ir mich gevallen an mit alsō maneger arbeit!* <an vallen 不意にやって来る> 「そなたたちはどうしてこんなに多くの苦悩をもって私の所にやって来るのだろう」 (同 S. 21)
- [45] *gehabt ūf des strītes* <ūf gehabt et² を中止する> 「(ブルゴントの一族郎党よ、) 戦いを中止してくれ」 (同 S. 571)

後期中高ドイツ語時代に入ってから、情報価値の高い語は主文で文末に配置されるようになったということであるため、この頃には前綴の位置も文末の位置に落ちてきていると考えられる。

このように、文献による解説や例文を参考とすることによって、分離動詞の古代から現代に至る成立過程を次のように推察する。

この3.2.節で調べたかったことは、ドイツ語の分離動詞は平叙文で何故基礎動詞は第二位に、前綴は文末の位置にくるのかという問題であった。3.2.1.

で既述のように調査の前段階で大まかな予測をしていた。それを再確認すると下の①～④のような順序であった。

- ①ゲルマン祖語から、定形後置という通常の語順があった。
- ②ドイツ語も動詞と関係のある成分は動詞の近くの後ろの方へに移動するという傾向があった。(SOV=定形後置)
- ③その後、定形が主文において第二位へ移行するという動きが生じた。
(SVO=V2 語順)
- ④分離動詞も同様にこの統語現象の流れに影響をうけ、基礎動詞が定形第二位の位置に移動して前後に分離するようになった。

しかし、歴史書、文法書、辞書による解説や例文を参考とすることによって、3.3.で述べてきたようなことが分かり調査前段階の順序に修正を加える必要が生じた。調査結果から実際分離動詞の発展の動きは下のような動きになっているのではないかと考えられる。

- (1) ゲルマン祖語から定形後置の動きがあった。
- (2) 動詞と関係のある成分も後ろに移動するという傾向があった。
(SOV=定形後置) その傾向は初期の頃から、現在まで続いている。
- (3) その後、定形が主文において第二位に移動するようになった。
(SVO=V2 語順)
- (4) 結果的に結びつきの弱い分離動詞は(2)と(3)の動きに影響され前綴りと動詞が前後に離れて行き、現在の位置に定着するようになった。

この番号は歴史的に発生が早いと思われる順番にはなっているが、分離動詞の形成過程の順ではない。分離動詞の形成過程において、実際には(2)と(3)の過程は同時進行していったと解釈できる。つまり、調査前段階におい

ては分離動詞は(2)の傾向がある程度確立し、動詞の位置が文末に収まった後、定形第二位の動きを予測していたのであるが、実際はそのような動きではなく、(2)と(3)の動きは同時に進行していたと思われる。

(2)と(3)が同時進行して行った結果、枠構造という統語現象が完成するのである³¹⁾。現代ゲルマン語ほど顕著ではないが古文献においてすでに枠構造への傾向はゲルマン語全体に拡がっていたという研究発表もあるので、ドイツ語の性格に内在している枠構造化への底流は古ゲルマン語の時代からあったようである。最終的には、調査前段階に予測した結果とは少し異なる結果になった。

Schildt も後期中世ドイツ語時代の説明文の中で、このようにして、しだいに枠構造が形成されて行ったと言っているので、このことはこの調査の結果と大きく相違していないことを意味しているのではないと思われる。彼は二つの要素が多少にかかわらず他の文肢を包み込むようになった結果完成された枠構造の例として3.1で示した例文[1]を挙げているのである。

(基礎動詞＋分離前綴)

Marggraf Albrecht und sein Fürsten die Sagen *namen* Nüernberg *ein*.

「辺境伯アルブレヒトと彼に従う諸侯たちは、ニュルンベルクを占領したと言っている。」

3.4. 副文と定動詞と分離動詞

古高ドイツ語時代(Schildtの区分では初期中世)に使われ始めた副文では、例文[24]、そして下の例文[46]、[47]のようにすでに定動詞文末配置が見られる。

(古期時代の定動詞後置)

[46] *wedar sih hiutu dero hregilo hrūmen muotti* 「今日これらの鎧を自慢することができるのか否か」(HL.58)

- [47] *tha3 fon Macedoniu ther liut in giburti gisceidinēr wurti* 「マケドニアからこの民族が誕生の際に分けられたこと」(O. I,1,91.92)

しかし、定動詞の位置は、必ずしも、文末に固定された状態ではなかった。この定動詞文末配置以外の例は、Schildt の例文[25]の他に高橋の『古期ドイツ語文法』(1994)にも見られる。

(定動詞が文中に位置する)

- [48] *dat Hiltibrant hætti mīn fater* 「わが父がヒルティブランドと呼ばれていたこと」(HL.16)
- [49] *tha3 er ist io in nōti gote thionōnti* 「彼がいつも熱心に神に仕えていること」(O. L.66)

(定動詞が前置する)

- [50] *fliuhit er in then sē, thār giduat er imo wē* 「もしも彼が海の中へ逃げても、そこで彼は彼に苦痛を与える」(O. I,5,55)

中高ドイツ語時代(Schildtの区分では盛期中世)の副文では、定動詞は現代ドイツ語と同様にすでに文末に配置されることが多くなっていた。例文[29]。同時にまた例文[30]のように定動詞が他の位置にきている副文も見られる。

分離動詞を見てみると『中高ドイツ語小辞典』(1991)には分離動詞も同様文末の位置にきていない例、あるいは前綴と基礎動詞が分離したままの例が見られる。

(分離動詞が文末に位置しない)

- [51] *du muost in verkiesen, daz er dir immer bī wone deheiner dienste <bī wonen j³ のそばにいる>* 「彼にあなたのおそばで何らかの奉仕をさせようなどということは断念して下さい」(S.77)

(分離動詞が分離している)

- [52] ez enist dekein man, der sich hier umbe iht *nimet* an <an nemen 敢えて～する>「不遜にもここでこのようなことをするような人はいない」(S.18)

(前綴りが文末にきている)

- [53] als er des limes danne entsebet und er sich *ūf* ze flüte *hebet* <ūf heben (再) 飛び立つ>「それ (=小鳥) はやがて鳥もちに気付き、逃れようとして飛び立つ時には」(S.571)
- [54] diu hoehe deist der hōhe muot, der sich *ūf* in diu wolken *tuot* <ūf tuon (再) 高く昇る>「(愛の洞窟の) 高さは雲の中まで昇っていく高揚した気持ちを表す」(S.572)

このように副文における定動詞の位置についても、古い時代から例文を見ていくと、ゲルマン語においては定形後置が通常の語順であるといわれてはいても、最初から文末の位置に固定していたということではなく、主文同様徐々に現在の位置に落ちてきたようである。

Schildtによると、主文に結び付けられた副文においては、16世紀には定動詞が文末に配置されることが次第に多くなり、17世紀には、定動詞の文末配置は、主文に結合された副文の構造的特徴となると同時に、統一共通文語の規範のひとつとなった、ということである。

ドイツ語の場合、副文において定形後置が固定化することによって分離動詞の前綴と基礎動詞は結合することになる。

- [55] Der sich immer wieder für mich *einsetzte*, war mein Freund Peter. <einsetzen (再) 力を尽す>「私のためにたびたび尽してくれたのは友人のペーターです」(『マイスター 独和辞典』1992. S.308)
- [56] Kaum hatte sie sich umgezogen, als der Besuch eintraf. <ein-treffen 到着する>「彼女が着替えを終るか終らないうちにもう客が到着した」(同 S.49)

ドイツ語を含めある種のゲルマン語は、このように主文と副文で語順が異なるため、同じ動詞が文の種類によって分離したり分離しなかったりすることがある。これによってまた、解決する必要がある次の課題が発生することになる。それは、3.2.1.の調査前段階で分離動詞と語順の関係について論じた際に提起した、「定形第二位という現象が主文では起こって、副文では、なぜ起こらなかったのか」という問題である³²⁾。

この問題については、その後研究論文の中にそのいくつかの説を見つけることができた³³⁾。ここではこれ以上詳しく追究しないことにする。

4. 発展過程の補足と今日の課題

第3章までに見てきたように、分離動詞の生成・発展は初期ゲルマン語時代においては句動詞の発展と未分化な形で進みながら、分離動詞の第一構成要素はある時は前綴りとして枠構造の構成に貢献したり、またある時は句動詞の一構成要素となったり、あるいは消滅したりしていった。何れにせよ、ゲルマン諸語の分離動詞はそれぞれの過程を経て現在のようない動詞となっていることが理解できた。

また、現代から分離動詞を振り返って見ると、ドイツ語においては補足しておかなければならない重要とおもわれる種々の問題もあることに気づいた。

その中から取り敢えず本稿では、二つのことだけ付言しておきたい。一つは、時代が分離動詞の発展にどのように貢献したかについての歴史的な補足説明である。そして、もう一つは、正書法改正と分離動詞にまつわる所々の問題と今日の課題である。

4.1. 生成・発展における時代の貢献

ドイツ語史を名詞や動詞などの新造語の生成史として見ていくと、新造語が誕生するためにはその時代の意識、特別な契機、内面的欲求、社会的背景、

当時の思潮や他の思潮への影響などそれ相応の理由が存在していたことを知ることができる。ここでは、古高ドイツ語時代から初期近代ドイツ語に至るまでの時代と新造語生成の関係を、語史から読み取れる範囲で³⁴⁾、殊に分離動詞と関係している造語方法や複合語、派生語に触れている箇所を中心に時代ごとに要点のみを拾ってみることにする。

〈古高ドイツ語時代〉

- 古高ドイツ語時代のドイツ語の造語に関しては、古い時代から用いられた造語法、つまり、複合、接頭辞や接尾辞の添加という派生方法が受け継がれ、さらに発展していくことになる。接頭辞添加という造語が最も顕著にみられるのは動詞である。動詞に関してはこの時代には30種類の前綴が見られる。分離前綴りとしては例えば、aba-, ana-, a3-, fora-, fram-, hera-, in-, ingegin-, nidar-, thana-, ūf-, umbi-, ū3-, widar-や zuo-などがある。Schmidt (2004) によると最も頻繁に用いられた動詞前綴は、bi-, er-/ar-/ir-/ur-, fir-/far-/fer-/-, ga-/gi-/ge-, int-や missi-である。また、例えば、-unga, -nissi, -ōt(i), -ī, -idi/-ida, -t や -īg/-ig/-ag/-eg, -isc, -i などの名詞や形容詞の古い接尾辞が新しい造語のために多く用いられた³⁵⁾。

〈盛期中世および後期中世ドイツ語時代〉

- 中高ドイツ語時代の宮廷文学では造語を好む傾向が強く、多数の新しい複合語、派生語が見られる。この時代に、minnekraft (愛の力), wortheide (言葉の荒野), wunschleben (理想の生活), trügevreude (偽りの喜び) などの複合語が誕生した。動詞としては、durchzieren (飾り立てる), entherzen (おじけさせる), überzaln (よけいに支払う) などが挙げられる³⁶⁾。

- 後期中世ドイツ語時代には複合という造語手段によって名詞領域では、新しい語彙が作り出された³⁷⁾。
- 派生という造語手段としては、-heit, -keit, -nisse, -ungeなどの派生語尾を使った新しい抽象名詞の創出がさかんとなった。これらは殊に神秘主義の著作物のなかに見られる³⁸⁾。
- 動詞領域でも、派生という手段によって新しい動詞が創出された。従来はまだ接頭辞 be-, ge-, ent-, er-, ver-, zer-を有する非分離動詞が優勢であったが、この頃には前綴 durch-, ein-/in-, über-, üz-/aus-, zuo-/zu-, under-/unter-, üf-/auf-, ab(e)-, an(e)-を有する分離動詞が前面に出てきた³⁹⁾。

durch-gān > *nhd.* durch-gehen (通り抜ける),

in-bilden > ein-prägen (刻印する),

über-vliezen > über-fließen (溢れ出る),

uz-vliezen > aus-fließen (流れ広がる),

zuo-vliezen > zu-fließen (注ぎ込む)⁴⁰⁾

〈初期近代ドイツ語時代〉

- 中世末期にはさまざまな職業の特殊語や専門語彙に属する語が多く見られるようになった。この頃登場した職業語には鋤夫語、狩猟語、兵隊語、法律語などが知られている。

複合動詞としては、berücken (魅惑する<狩猟語), ein-kreisen (包囲する<狩猟語), nach-stellen (待ち伏せする<狩猟語), nach-spüren (追跡する<狩猟語), auf-schieben (延期する<法律語), sich beziehen (~を引き合いに出す<法律語), überzeugen (納得させる<法律語), sich entschuldigen (釈明する<法律語), verantworten (責任を負う<法律語)などがこの頃

に由来すると考えられる⁴¹⁾。

- 新しい名詞はとりわけ複合という手段によって創出された。新しい語彙の獲得の際、初期近代ドイツ語では、派生という手段も用いられた。
- 17世紀および18世紀、宗教的内面の深化を求めた敬虔主義の改革運動と共に現れた文書の中に、すでに後期中世ドイツ語時代の神秘主義の書物のなかでも用いられていたような派生語が生み出される。名詞については、語尾-ung, -heit, -keitによる派生語が、形容詞では-lichに終わる語が増えた⁴²⁾。
- 動詞の造語の中で特徴的なのは、接頭辞造語および、第一構成要素に副詞を持つ複合語である。17世、18世紀の間にも、動詞の造語体系の拡張は進み、第一構成要素の種類は増え、その数は目立つほどの多さになってきた⁴³⁾。
- 敬虔主義に見られる典型的な動詞についても、その見本となる形はすでに神秘主義の書物の中に存在していた。非分離前綴 er-と共にとくに分離・非分離前綴 durch-が用いられた。

er- : erdürsten (ひどく喉が渴く), errufen (叫び声をあげる), erschmecken (味わう), erschreien (声を出す), erweinen (涙を流す)

durch- : durchdringen (<分離>侵入する; <非分離>貫通する), durchfeuern (興奮させる, 激昂させる), durchgehen (<分離>通過する; <非分離>歩き回る), durchglühen (<分離>十分灼熱させる; <非分離>燃え立たせる), durchhitzen (<分離>十分熱する; <非分離>暖める, durchnetzen (<非分離>完全に湿す)⁴⁴⁾

- 内面の深奥部にまで達した宗教的感性を表現するため、その手段として分離前綴り an-, ein-/hinein-, empor-, entgegen-, hin-, nach-, zu-の付いた動詞が用いられた。これらの複合語を使用することで、共通文語は再び生き

生きしたものになると同時に、より具象的で表現力に富んだものとなった⁴⁵⁾。

ein- : ein-drücken (押印する), ein-fließen (注ぎ込む), ein-leuchten (〈光が〉差し込む)

hinein- : hinein-senken (中に沈める), hinein-pflanzen (植え込む)⁴⁶⁾

- また、その他にこの時代現れた前綴りとして Schmidt は、ab-, aus-, ent-なども入れている。

ab- : ab-lauben (木の葉を落とす), ab-legen (脱ぐ), ab-ricchen (蒸発させる)

aus- : aus-ackern (鋤き終わる), aus-bangen (苦痛を取り除く), aus-hellen (明るくなる)

ent- : entadeln (貴族の身分を奪う), entlodern (燃え立つ), entnebeln (霧をのぞく)⁴⁷⁾

- 18世紀後半にますます使われるようになった entgegen-による造語には、コンテキストにより異なるニュアンスが見て取れる。

(空間の動き)

entgegen-eilen (急いで迎えに行く),

entgegen-fahren (乗り物で迎えに行く)

(対立・反対)

entgegen-setzen (対抗させる), entgegen-stehen (対立している)

(音響的なもの)

entgegen-donnern (〈～向かって〉大声で怒鳴る),

entgegen-jauchzen (歓声を浴びせる)⁴⁸⁾

この種の造語による意味の推移と Klopstock の詩との関連を Schmidt は指摘している。entgegen-を使った動詞には空間的な意味の代わりに、心的ならびに精神的に迎え入れる行為が示されている⁴⁹⁾。

entgegen-hören (耳を傾ける), sich entgegen-freuen (喜びを受ける),
entgegen-segnen (祝福を受け入れる), entgegen-sehnen (憧れを受ける)

Goethe の語彙にも、例えば120以上の entgegen-による造語と160以上の ent-による造語、更に、aus-に至っては380もの造語が見られるということである⁵⁰⁾。

- Erben によると、特に敬虔主義と Klopstock につながる18世紀の文学語の刷新運動が、今日の造語における前綴体系の構造的で機能的な多様さを獲得するようなプロセスを促進したことになる⁵¹⁾。

4.2 正書法と課題

第1章 a-2節で既述のように、旧正書法では rad-fahren, Auto fahren のように構造的にも名詞と動詞の関係も同じ動詞句が、分離動詞の中に含まれたり、含まれなかったりしているケースもあったので、新正書法ではその混乱を解消するため、分離動詞については規則が改められ分離動詞に関する一般的な規則は §34の中に新たに定められている。それによると、分離動詞の前綴となる要素は小辞 (Partikel)、形容詞、名詞に限られる、ということである。

それでも、分離動詞かどうかの判定には非常に困難が伴うことも事実である。

清水 (2002) 指摘のように新正書法では、旧正書法で続け書きしていた小辞、形容詞、名詞以外の分離成分を分かち書きをすることで、分離動詞の種

類を制限しようとしているが、分離動詞に関する新正書法にも種々の問題があることが指摘されている⁵²⁾。下に示した問題はその中のいくつかである⁵³⁾。

- (1) 続け書きが許される小辞前綴りの数の多さ
例：リストには90以上の小辞前綴りが載っている
- (2) 続け書きが許される小辞が選ばれた合理的説明がない
例：davon-, daneben-などが続け書きが許されて、dahinter-, d(a)runter-, darüber-, davor-は許されない
- (3) 小辞前綴りリストと単語表が一致していない
例：bevor-stehen (目前に迫っている), drein-blicken (〈～な〉目つきをする)は単語表では続け書きされているのに、bevor-, drein-は前綴りリストには見当たらない
- (4) 独立した語としては用いられない副詞または形容詞が前綴りの場合は続け書きとする
例：fehl-gehen(道を間違える), feil-bieten(売りに出す), kund-geben(知らせる)の fehl(誤った, 失敗した), feil(金で買える), kund(知られた)はいずれも単独で用いられる語である
- (5) 言語使用者の意識が忠実に表記に反映されなくなった
例：旧正書法の kennen-lernen(知り合いになる)は lesen lernen(読み方を習う), schreiben lernen(書き方を習う)などのような動詞の組み合わせとは異なり、本来の意味が希薄になったから続け書きされるようになったのである

(6) 同音異義が識別しづらくなった

例：旧正書法の *sitzen-bleiben* (留年する) は *sitzen bleiben* (座ったままである) と意味の違いがあった

このように、新正書法になってもまだ解決されない問題は存在しているし、旧正書法の方が良かったと思えるケースもある。例えば、上述の(5)、(6)などはそうである。このため、分離動詞とそうでない動詞を続き書きすることで区別することに疑問をもっている学者もいる⁵⁴⁾。

分離動詞には以上のような多くの問題が含まれているため、分離動詞の種類と特徴を学習する際、学習者も同じ問題に躓いたり悩んだりする可能性がある。学習と理解における課題としては、新正書法の分離動詞の場合続け書きにするか分かち書きにするかは、あくまでも

- 形態上の一つの規則である
- 区分しやすさを優先した分け方である
- 意味の区分ではない

ということを念を押して教える必要がある。学習者の中には旧正書法の頃からドイツ語を続けている人も多いかと思われるが、そういう人に対しては新正書法による分離動詞の区分については特にそのような説明をして納得してもらうことが肝要かと思われる。

5. 結 論

今回の分離動詞の発生に関するテーマは学生からの質問が契機となり調査してみることにしたのであるが、前もって相当な準備をして取り掛かったわけではないので、所々で予想以上に立ち止まってしまった。

殊に、3.2.節「分離動詞の生成過程」に対しては、古期ドイツ語から新高

ドイツ語まで時代ごとのデータを一つ一つ蓄積して、その中で分離動詞の小さな変化や動きを具に観察していくのが最良の方法と思われる。短期の調査期間であったためか分離動詞の歴史的な流れに関する研究報告も資料も見つからず、同テーマに対してここで採用した方法は、ドイツ語史、文法書、辞書等を頼りに関係論文や推論も交えて考察することであった。種々の制約から、調査しても結果が出てこない項目も多かった。手元にある資料だけでどれ程分離動詞そのものに近づくことができたのか分からないが、調査の結果をまとめると次のようになる。

調査目標の一つに、分離動詞が最初にいつごろ出現したかを記録で確認すること、というのがあった。しかし、ゲルマン祖語時代の文献が残っていないという文献制約上の問題があり、ゲルマン祖語時代の分離動詞の記録の確認はとれていない。その前の印欧祖語時代はどうかという問題もあるが、印欧祖語時代においてもゲルマン祖語時代と同様文献の問題と、当時の複合動詞がゲルマン語あるいはドイツ語の分離動詞と直接繋がりがあがる動詞かどうかを証明することもまた困難であると思われる。このような事情により、分離動詞の最初の出現についてはゲルマン祖語時代とそれ以前については遡ってはっきりとしたことを記録で証明することはできなかった。しかし、ドイツ語については少なくとも古期ドイツ語時代には既に出現していたことを、現存している古期ドイツ語時代の文献で確認できた。

古期ドイツ語時代の文献には、3.章で示したように分離動詞の記録が残っており、ドイツ語分離動詞の初期段階においては、現在の分離動詞とは異なり平叙文で不変化詞が前置した形と、後置した形の並存が確認できた⁵⁹。また、この時代には前綴や基礎動詞の位置もまだ一定しておらず、種々のケースがみられる。このことを考えると、分離動詞は初期の頃は枠構造との強い関係はないかのようなのである。むしろ、独自に発生し、変化しながら発展してきたように見える。

中世以降は4.章でも確認したように敬虔主義や神秘主義などそれぞれの時代の要請にもより、自然にあるいは人工的に分離動詞の数は一層増加して

いったことが記録にも残っている。

定形後置や平叙文における定形第二位という語順も、定形後置が先で、次に定形第二位という語順が生まれたので現在のような分離動詞の形となったという調査前の考えは、古期ドイツ語時代から記録を見ていけば、定形後置や平叙文の定形第二位という語順は、それぞれが揺れながらも時代が新しくなるにつれて次第に個々に特定の位置に固定してきたようで、修正が必要となった。この主文、副文での定形の位置が徐々に固定していくに従い、主文での基礎動詞と前綴による枠構造、副文での後置という分離動詞の位置も徐々に確定していくことになった。ゲルマン語の中で、枠構造が発展して行った言語については分析表現との関係を指摘している論文もある⁵⁶⁾。そして、他の西ゲルマン諸語に比べ、分離動詞も含めドイツ語の枠構造が特に徹底しているのは、現代ドイツ語では規範文法の中で規定されている⁵⁷⁾ことその他に、文章がますます複雑になっていったのでより一層の規則化が必要となったこと、書くように喋るという時代の必要性があったことも忘れてはならない。このような解釈が今回の文献で学んだ範囲においては語史に沿った見方に近いのではないだろうか。

最後に、本稿は学生から質問があり、それを学生の環境で調べ学生に読んでもらうよう書いたので、まず質問した学生に読んでもらいたい。

引用作品

(古ドイツ語文献の略称)

HL.=ヒルデブラントの歌(東フランク語+バイエルン語+ザクセン語, 9世紀初め)

O.=オットフリートの聖福音集(南ラインフランク語, 863-871年完成。L.はルートヴィヒ・ドイツ王への献詩)

Pr.=プルデンティウス注解(ザクセン語, 10世紀末)

T.=タツィアーンの総合福音書(東フランク語, 825年頃)

(『中高ドイツ語小辞典』1991)

『ニーベルンゲンの災い』(Der Nibelunge Nôt)、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ:『バルツイヴァール』(Parzival)、『ヴィレハルム』(Willehalm)、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク:『トリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde)、ハルトマン・フォン・アウエの諸作品

注

- 1) 「英語史において最も目立つ文法変化の1つに、古英語期に持っていた名詞の性・数・格を表す屈折語尾を失ったことがある。同様に、動詞も、人称・数・時制・法を表す複雑な屈折語尾をほとんど失ってしまった。」宮前 1997 S.22
- 2) 分離動詞の機能を有する言語にはドイツ語、オランダ語、フリースランド語がある。また、語源系統と分離の様態は異なるものの、やはり動詞の前綴りが分離するものとしてハンガリー語がある。
ドイツ語の分離動詞の機能は英語には無いが、類似の現象として句動詞の中に動詞と前置詞、または副詞が目的語を挟む形態をとる場合がある。
例：Noise always puts a person out. 「騒音には誰もが悩まされる」
- 3) 「古英語 (OE) では、副詞辞 ([adverbial] particle) は動詞 (verb) の前に位置する傾向があった。Hiltunen (1983) によれば、OE では主節、従節共に P (...) V 型が一般的であった。中英語 (ME) に入り、V (...) P 型が優勢になり、後期中英語 (IME) では、P (...) V 型はほとんど見られなくなる。」神谷 2002 S.305
- 4) この中には新正書法では分離動詞に含められていないものもある。その他、第一構成要素には前置詞+名詞の合接を伴う動詞、副詞 da+前置詞との融合形である合接副詞、her および hin+前置詞と結びついた動詞もある。
 - 前置詞+名詞
zufrieden-stellen (満足させる), zurecht-legen (きちんと置く)
 - da+前置詞
drauf-gehen (失われる), dran-kommen (死ぬ)
 - her および hin+前置詞
herab-sehen (見下す), hinunter-bringen (下へ連れて行く)
- 5) 「前置詞の多くは歴史的には元来場所の副詞であり、これが一方で補部をもつ前置詞という語彙範疇へと発展し、他方では動詞領域に引き寄せられ、不変化詞へと転化していった。」(吉田 1998) ということであるので、ここではこのタイプの不変化詞は前置詞と副詞に分けず、前置詞・副詞として一つに扱う。
- 6) ここでは Komposition の訳に野入・太城 (2002) に倣って「複合」という言葉をあてているが、学者、専門書によっては「合成」という言葉を使用している場合もある。
- 7) Erben 1983 S.55ff.
- 8) Fleischer 1969 S.279ff.
- 9) LGL 1980 S.170ff.
- 10) 野入・太城 2002 S.149ff.
- 11) その他にも分離動詞として次のような特徴がある。
 - (1) 過去分詞は基礎動詞との間に ge-が入り、一語に続け書きされる
Sie hat gestern ihre Mutter angerufen. 「彼女は昨日お母さんに電話した」
 - (2) zu 不定詞の場合は基礎動詞との間に zu が入り、一語に続け書きされる
Der Vater hat keine Zeit, die Mutter anzurufen. 「お父さんはお母さんに電話する時間がない」

- (3) 分離動詞によっては意味の抽象化・特殊化がある
auf-stehen 起きる, an-rufen 電話する, …
これは、spazieren-gehen (散歩に行く), davon-eilen (急いで立ち去る) など全て
の分離動詞にあてはまるわけではない。
- 12) Schildt 1999 S.104
13) 同上書 S.105-106
14) 高橋 1994 S.159-160
15) 同上書 S.159 理由は今のところ分からないが、梓構造も南から発生し北へ伝播して
いったということである。
16) 同上書 S.159-160
17) Schmidt 2004 S.157
18) 本訳書は Otfrids Evangelienbuch-liber evangeliorum, evangeliorum pars, evangeliono deil-
の本文 7104 行のうちの 922 行が選ばれたものである。また、20 以上という正確な数字
を挙げなかったのは、古高ドイツ語時代は分離動詞と前置詞・副詞+動詞の判別が
難しいからである。研究者によってはこの時代この二種類の動詞句を区別することは
あまり意味がないとまで言っている。
「古代高地ドイツ語の時代では、(合成動詞の) 第一構成要素と第二構成要素の意味
関係はきわめて密接なつながりを持っているし、また動詞に添加される接頭辞 (= 前
綴り) の働きと、機能的には差がある副詞と動詞とにみられる合成の働きとの間に生
じる差異があまりに小さいため、両者を分類することはほとんど無意味である。」
(Schmidt 2004 S.158)
19) 岩本 2006 S.95
20) 例えば、注 3) を参照。本文の不変化詞+動詞の変化の例は神谷 (2014) から引用。
21) 例文を紹介している伊藤は、この *ut* を接頭辞とみなすか、独立した副詞と見なすか
は難しいと言っている。伊藤 2010 S.58
22) 同上書 S.58 例文は A Microfiche Concordance to Old English からのものと思われる。
23) 伊藤 2010 S.57
24) この並存タイプの分離動詞は現在のスウェーデン語にもまだ見ることができる。
(A) *Vi bjuder in många gäster.* <我々は多くの客を招き入れる>
(B) *Vi inbjuder många gäster.* <我々は多くの客を招き入れる>
(A) は動詞 *bjuda* <招く> と不変化詞 *in* (英. *in*) との組み合わせを分離させて不変化
詞を後置した文で、(B) は不変化詞を前置して一語で用いた文である。この場合、意
味はどちらも同じであるが、(A) は口語体でよく用いられ、(B) は文語において用い
られる傾向がある。ただし、最近では文語においても (A) を用いるのが一般的になりつ
つあるようである。川崎 2006 S.4
25) 松瀬 2011 S.84
26) A comparative glossary (1887) には、*gaggan*+不変化詞の出典の記述はあるが意味に
ついては書かれていない。
27) 参考として時代をもっと遡り、印欧祖語に関する文献まで調べてみると、印欧祖語の

時代にもすでに複合動詞という動詞は存在していたようである (Catt 2014)。しかし、この動詞がゲルマン語の分離動詞と関係があるのかどうかについては分からない。

- 28) 河崎は分離構造といわずに枠構造と言っている。河崎 1997 S.92
- 29) 宮前 1997 S.22
- 30) 社会の発展とともに必然的に複雑化した実務に関わる事柄を判然と遺漏なく記録しておかなければならない公文書では、しばしば超長文の複合文が多用される現実があったと Schildt は言っている。Schildt 1999 S.153
- 31) 『中高ドイツ語小辞典』で分離動詞の位置を確認した限りにおいては、第二構成要素の定形 (=基礎動詞) が第二位以外に位置する比率と第一構成要素の前綴が文末以外に位置する比率は、前綴が文末以外に位置する比率の方が多かった。枠構造構成要素が文末位置に来る確率 (枠構造の完成度) は同じ枠構造を構成する他の助動詞構文などと比較すると、枠構造を構成する文法項目の種類によって異なるようである。時代は少し新しく初期新高ドイツ語 (16世紀) になるが、主文の枠構造に関する研究によると、枠構造を構成する項目により完全枠の割合は異なり、調査項目の中では分離動詞構文が完全枠の割合が最も低いという報告がある。工藤 (1994) による例を示すと次のようになる。

例: 『聖書』(ルター聖書 1546)

総数	完全枠	部分枠	非枠	枠不可	枠内 1	枠内 2	枠内 3以上
話法の助動詞 129	93	28	6	2	48	50	23
完了形 35	25	3	0	7	11	11	6
受動態 23	13	0	1	9	9	1	3
分離動詞 84	40	10	6	28	39	9	2
計 271	171	41	13	46	107	71	34

表の見方としては、枠内 1 (2, 3 以上) は枠内成分が 1 個 (2 個, 3 個以上) であることを示す。表の上にある項目ほど枠内の割合が高く、枠不可は少ない。工藤は分離動詞の枠の規模が小さい理由として、分離動詞が未発達というわけではなく、前綴が不定詞や過去分詞に比べて語が小さく、枠を作る力が弱いことに起因すると考えられると述べている。(S.26-27)

- 32) 英語について前述の宮前 (1997) の言う、「名詞の格語尾が失われてしまうと、どれが主語でどれが目的語か語順によってしか判断できなくなる。その結果、語順が固定される必要が生じる」。こうして、「古英語では、主節は SVO、従属節では SOV という語順が徐々に規則的になっていった」。その後、「英語は古英語末期になると従属節中でも SVO に固定されていった」ということであるが、この説明によって英語における語順の固定化の必要性は理解できるものの、それ以前の問題としてドイツ語にも英語にも主文 (主節) に見られた定形第二位という現象が、なぜ副文 (従属節) (英語では古英語時代) においては起こらなかったのかという問題は依然として解決されないままである。

- 33) 主文で定形第二位が発生した理由[A]、副文で定形第二位が実現しなかった理由[B]については、いくつかの説を主として比較的新しい田中（2008）の研究から紹介しておく。

[A] 主文における定形第二位発生に関する説

- (1) OV と VO の配列の存在を、一方が他方から派生した（どちらか一方を基礎語順とする）という考え方を基準としない（Weermann 1989）
- (2) 形態的マーキングが退化したことが義務的な動詞前置を発達させるに至った原因である（Lenerz 1984）
- (3) 定動詞移動が成立した背景には音韻的メカニズムがある（Kiparsky 1995）
- (4) 疑問詞や話題素、肯定不変化詞が定動詞移動と関係している（Fuss 2003, Roberts 2004）
- (5) 統語的に文ムードを明示する主要部位置の発達（田中 2008）
（補足）

(2)の Lenerz 説については、定動詞がその形態を失ったことがなぜ「定動詞の前置」につながるのか、何も述べられていない。これに対し、(3)の Kiparsky が言うように、古ゲルマン諸語の定動詞には豊かな屈折形態と並んで強いアクセントが置かれていたが、定動詞がその豊かな屈折形態を失うにつれて強勢も失い、音韻的に軽くなった定動詞は次第に前置されるようになっていったというのは、一般的な音韻・統語規則で説明できる現象である（2008 S.13）。また、(5)については、定動詞前置の成立について、当該文タイプ明示の必要性のもと、それを実現するための機構として定動詞移動という統語操作が発達するに至ったという考え方である。（同上書 S.23）。

[B] 副文における定形第二位非実現に関する説

- (1) 副文では主題化が起りにくく、その言語の無標識であった語順が反映される（河崎 1994）
- (2) 語順の変化はまず主文に、続いて副文にもたらされる（河崎 1994）
- (3) 話者指定の文タイプ指定（文タイプの話者指向性）（田中 2008）
（補足）
- (1) SOV の型の方が、ゲルマン語から受け継がれた本来的な型であり、現代ゲルマン語では通常の型である SVO の型が改新型であるとみなされる（河崎 1994 S.89）。
- (2) ゲルマン諸語でも副文にゲルマン祖語の古い型が保持されている（同上書 S.89）。
- (3) 副文にも、間接疑問文のように文タイプ（間接疑問文の場合、文タイプは [+Q] <＝疑問詞あり>）が指定されるものがあるが、これらは主文中の動詞（主動詞）に選択されるものであり、話者の認識態度に選択されるものではないため、定動詞移動は生じないという考え（田中 2008 S.23）。

- 34) 主として、Schildt, Schmidt, Polenz を参考とした。

35) Schmidt 2004 S.158-159

36) Polenz 1974 S.66-67

37) Schildt 1999 S.105

38) 同上書 S.105

- 39) 同上書 S.106
- 40) 同上書 S.106
- 41) Polenz 1974 S.76
- 42) 同上書 S.69
- 43) Schmidt 2004 S.293
- 44) 同上書 S.293
- 45) Schildt 1999 S.158
- 46) Polenz 1974 S.131
- 47) Schmidt 2004 S.294
- 48) 同上書 S.294
- 49) 同上書 S.294
- 50) 同上書 S.294
- 51) Erben 1983 S.120
- 52) 清水 2002 S.35
- 53) 中山 2003 S.239
- 54) 亀井・河野・千野（編者）1996
- 55) 3.1.のペア例文[2]～[11]を参照。このタイプの分離動詞は前述のように古いゲルマン語ではゴート語、古英語、古北欧語にも見られる。
- 56) 河崎 1987 S.92-95
- 57) 同上書 S.84

参考文献

- Catt, A.A.: *Studies in Indo-Iranian Historical Linguistics* (インド・イラン語の歴史言語学的研究) 京都大学博士学位論文要旨 2014.
- Erben, J.: *Einführung in die deutsche Wortbildungslehre*. 2. Aufl. Berlin. 1983.
- Fleischer, W.: *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Leipzig. 1969.
- Fuss, E.: "On the historical core of V2 in Germanic". In: *Nordic Journal of Linguistics* 26.2, Oxford University Press: Oxford. 195-231. 2003.
- Kiparsky, P.: "Indoeuropean Origins of Germanic Syntax". In: A. Battye & I. Roberts (eds.) *Clause Structure and Language Change*, Oxford University Press: Oxford. 1995.
- LGL: *Lexikon der Germanistischen Linguistik*. Tübingen. 1980.
- Polenz, P.v.: *Geschichte der deutschen Sprache* Berlin. 1972. (『ドイツ語史』岩崎英二郎他訳 東京 白水社 1974.)
- Roberts, I.: "The C-System in Brythonic Celtic Languages, V2, and the EPP". In: L. Rizzi (ed.) *The 17 Structure of CP and IP*, Oxford University Press: Oxford. 297-328. 2004.
- Schildt, J.: *Kurze Geschichte der deutschen Sprache* Berlin 1991. (『[図説] ドイツ語の歴史』橘好碩訳 東京 大修館書店 1999.)

- Schmidt, W.: *Geschichte der deutschen Sprache Ein Lehrbuch für das germanistische Studium* 8. Auflage Stuttgart 2000. (『ドイツ語史』西本美彦他訳 東京 朝日出版社 2004.)
- Weerman, F.: *The V2 Conspiracy: A Synchronic and Diachronic Analysis of Verbal Positions in Germanic Languages*. Dordrecht: Foris. 1989.
- 伊藤 晝:「中英語詩 Havelok における ut-再考: Separable verbs の particle 分離過程」信州大学 人文科学論集文化コミュニケーション学科編 44 2010.
- 岩本 忠:「古期英語強変化動詞の類別定義と韻構造 -基本型と変異型-」『京都産業大学論集』人文科学系列第 34 号 2006.
- 神谷昌明:「古英語に現れる副詞辞と動詞接頭辞-Brooklyn Corpus を検索して-」豊田工業高等専門学校研究紀要 第 35 号 2002.
- :「句動詞のルーツを考える~そして英語教育へ~」愛知教育大学英語英文学会『会報』第 20 号 2014 年。(予定)
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一(編者):『言語学大辞典第 1 巻』三省堂 1996.
- 河崎 靖:「ドイツ語枠構造の史的発達について」人文研究 (STUDIES IN THE HUMANITIES) 大阪市立大学 第 39 巻 6 号 1987.
- :「統語変化の方向性—ゲルマン語から古高ドイツ語にかけて」ドイツ文学日本独文学会 92 1994.
- 川崎良江:「スウェーデン語における不変化詞 ut について—意味的分類を中心に—」独語独文学研究年報=Nenpo. Jahresbericht des Germanistischen Seminars der Hokkaido Universität, 33 2006.
- 木下文夫:『ゴート語小文法』佐賀 木下文夫 1992.
- 工藤康弘:「初期新高ドイツ語における主文の枠構造について」ドイツ文学日本独文学会 92 1994.
- 清水 誠:「西フリジア語の文法構造: 動詞(6)」北海道大学文学研究科紀要=The Annual Report on Cultural Science 108 2002.
- 新保雅浩:『古高ドイツ語 オトフリートの福音書』東京 大学書林 1993.
- 高橋輝和:『古期ドイツ語文法』東京・大学書林 1994.
- 田中雅敏:「ゲルマン諸語における定動詞移動の歴史的変遷と定動詞位置の最適性理論分析」広島独文学会(編)『広島ドイツ文学』22 号 2008.
- 野入逸彦・太城桂子:『語彙・造語』<ドイツ語文法シリーズ 7> 東京 大学書林 2002.
- 中山 豊:「ドイツ語新正書法 § 34 の問題」藝文研究 (The geibun-kenkyu: journal of arts and letters). Vol.84, (慶應義塾大学藝文学会), 227(16)-242(1). 2003.
- 宮前和代:「ことばはなぜ変わるのか」『専修大学法学研究所所報』第 16 号 16-43 1997
- 松瀬憲司:「get/give/take・句動詞・ヴァイキング」熊本大学教育学部紀要人文学部 60 2011.
- 吉田光演:「Verb+Partikel と分離動詞の英独比較」日本独文学会シンポジウム「言語類型論とゲルマン語学」 4. 提案 関西学院大学 1998.
- (辞典)
- Matthias Lexers *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*: 33. Auflage Stuttgart 1972.
- 伊藤泰司他:『中高ドイツ語小辞典』東京同人社 1991.

国松考二他：『独和大辞典』東京小学館 1985.

戸川敬一他：『マイスター 独和辞典』東京大修館書店 1992.

Mæso-Gothic Glossary : & List of Anglo-Saxon and Old and Modern English words etymologically connected with Mæso-Gothic, by Walter William Skeat 1868.

A comparative glossary : of the Gothic language with especial reference to English and German.
With a preface by Francis A. March 1887.